

ふゆなぎ／冬の海の波がおだやかなこと。冬の海は、西高東低の気圧配置の影響で荒れることが多いが、ときには風もなく波もほとんどたないことがある。

らしらく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

「命」を守る、記憶をつなぐ 平成26年8月 豪雨災害から 10年



CLOSE UP 01

可部学区自主防災会連合会
地域で起きた災害を学び、未来に生かす防災授業



CLOSE UP 02

子育て・サークル応援グループMaMaぽっけ・広島経済大学
紙芝居「なっちゃんのランドセル」が
伝える豪雨災害と防災



CLOSE UP 03

一般社団法人梅林学区復興まちづくり協議会
「広島市豪雨災害伝承館」が伝える
教訓と知識を防災に生かす

連載

- ▶らしらくレポート 大学の知見を地域課題解決に生かす共創空間
- ▶らしらくコラム 災害を「自分ごと」と捉えて備えられますか? ▶ようこそ! 公民館へ〜安佐南区内公民館〜
- ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶Hmi助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



地域で起きた災害を学び、 未来に生かす防災授業

降雨試験機体験の様子(令和6年10月)

「命」を守る、記憶をつなぐ 平成26年8月豪雨災害から10年

広島市で甚大な被害をもたらした豪雨災害から10年が経ちました。今もこの災害を忘れず、後世に伝え、防災に生かすために、さまざまな活動をしている団体を紹介します。

CLOSE UP

可部学区自主防災会連合会

災害の知識、防災意識を高めるための 出前授業

令和3年から、可部小学校で防災に関する出前授業を行っている可部学区自主防災会連合会は、24人が所属しています。以前は、一年に一度の防災訓練を行うだけでしたが、近年、広島



▲ 会長の川本勇二さん

市内でも災害が頻発する中、メンバーの大半が防災士の資格を取得し、地域住民の「災害に対する知識や、防災への意識を高める」ことを目的に小学校での出前授業を始めました。

当初は、5年生の授業の1コマを使って、「平成26年8月豪雨災害」で受けた可部地

区の被災状況に焦点を当て授業を行いました。土石流が発生した可部東の現場や、学校近くを流れる根谷川の護岸崩落の様子を写真で紹介。その後、年を重ねるごとに内容をブラッシュアップし、令和5年からは複数回授業を行っています。

「可部学区は、山が近く土石流が発生しやすいエリアと、水に浸かる可能性が高いエリアが広範囲に及びます。回数を重ねる度に、子どもたちの関心も高くなっています」と会長の川本勇二さん。

見て、聞いて、体験して、災害を学ぶ

令和6年は、国土交通省中国地方整備局や安佐北区社会福祉協議会などもプログラムに協力し、「平成26年8月豪雨災害」時に八木地区で観測された、1時間あたり130ミリの雨を再現する降雨試験機や、土石流模型実験装置、3D土石流体験装置を使い、子どもたちも災害の激しさを実際に体験しました。「普段、なかなか家庭では防災について話をする機会が少ないと思います。しか



▲ 防災授業の様子(令和6年10月)

し、災害はいつ、どこで起きるのか予測はつきません。自分の身の回りで起きた時に、どう対処しないといけないのか、ちゃんと理解しておく必要があります。子どもの頃から積み重ねる学ぶ事で、いざという時に必ず役に立ちます」。

また1月の能登半島地震を受け、緊急時の飲み水や、生活用水の確保する手段を増やそうと、可部小学校の敷地内に残っていた、地下から水をくみ上げる手押しポンプを復活させる取り組みも行っています。

今年は大雨や台風はもちろんですが、能登半島地震、8月に宮崎県沖で南海トラフに関連すると考えられる地震が発生。より地震による災害リスクも高まっており、県内の断層や、南海トラフが発生した際の影響、緊急時に必要になる簡易トイレの作り方もプログラムに組み込み、さらに防災への意識を高めています。

「昔の文献を紐解くと、可部学区は何度も水害に見舞われています。その過去の経験を、いかに未来に生かしていくのか。しっかりと子どもたちに伝えれば、家庭の中で話題になり、親も興味を持つようになる。そうやって、多くの人に防災について関心を持ってもらいたいと考えています」と川本さん。命を守るために、何ができるのか、しっかりとした備えや、防災の普及に取り組む皆さんの活動は、地域住民を災害から守る大切な活動だと感じました。



▲ 土石流模型実験装置

contents

特集

**01 「命」を守る、記憶をつなぐ
平成26年8月豪雨災害から10年**

- ▶ 可部学区自主防災会連合会
- ▶ 子育て・サークル応援グループMaMaぼっけ・広島経済大学
- ▶ 一般社団法人梅林学区復興まちづくり協議会

05 らしくレポート ひろ記者が行く

- ▶ 大学の知見を地域課題解決に生かす共創空間

らしくコラム

- ▶ 災害を「自分ごと」と捉えて備えられますか?
広島大学 防災・減災研究センター長・特任教授
海堀 正博

06 ようこそ! 公民館へ

- ▶ 安佐南区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

- ▶ 図書ボランティアわらっと
- ▶ 田頭 和茂さん

09 Hmi助成支援団体のご紹介

- ▶ ぼるけーのの会
- ▶ 特定非営利活動法人ホープスマイル
- ▶ 一般社団法人100年後の広島を創ろう委員会

11 情報の森

15 プラザ通信

紙芝居「なっちゃんのランドセル」が伝える豪雨災害と防災

子育て・サークル応援グループMaMaぽっけ・広島経済大学

子どもを守る親の立場で防災に取り組む

子育てサークル出身の親たちがこれまでの経験を活かし、親のサークル活動を支援するボランティアグループ「MaMaぽっけ」。平成13年に発足し安佐南区ボランティアセンターを中心に子育てサークル交流会や、サークル模擬体験などができるサロンの開催、子育て世代向け防災情報発信などを行っています。代表を務めるのは坂本牧子さん。



▲子育て世代向け防災冊子「ママの防災ぽっけ」

サークル活動の楽しさを伝え、親たちのリフレッシュの場を広げてきた同会に変化が訪れたのは平成26年8月20日。広島市にも大きな被害をもたらせた「平成26年8月豪雨災害」でした。「もしもの時、わが子を抱えて自分ができることは何か?多くの子育て世代の親たちが不安な気持ちになっていた」と当時を振り返る坂本さん。それから3年の時間をかけ、子育て世代向け防災冊子「ママの防災ぽっけ」を制作。安佐南区の子育て世代を中心に、これまでに1万部を配布しています。「災害時に子どもの安心を最優先に考え、寝る・遊ぶ・食べることの確保や避難所の確認、食糧や水のローリングストックなど、なんとなく不安だけど知っておくことで安心に繋がる情報をまとめた一冊。私たちの思いを込め、手渡して配布してきました」。

地域の大学と協力して災害を風化させない



▲鎮魂のキャンドルナイトの様子(令和6年8月20日)

防災活動を継続しながら令和元年の夏には「あの災害を忘れてはいけない」と紙芝居を制作するプロジェクトがスタート。「発災から5年が経過し、災害の関心が薄れていくのを肌で感じた」と話す坂



▲紙芝居の上演、避難時に必要な物資の紹介・展示の様子

本さん。「なっちゃんのランドセル」と名付けられた物語は災害で2人の息子が犠牲になった母親の話が原案となり「言葉では言い表せない苦しい体験を私たちに話し、託してください。その思いをカタチにすることが私たちの義務だと製作に励んだ」と言います。加えて、民生委員、防災リーダーなど多くの人の体験談を基に令和2年9月に完成しました。

紙芝居は安佐南区の公民館や小学校を中心に、さまざまな防災フェスでも上演し、令和3年からは、貸し出しも始めました。また、紙芝居が出来上がるまでの経緯や思いを話す活動も行っています。

この紙芝居は、広島経済大学興動館『武田山まちづくりプロジェクト』の学生たちが、地元山本小学校でも上演を行っています。そして令和6年8月20日、災害から10年を迎えたこの日、多くの人が集まり手を合わせた鎮魂のキャンドルナイトでも上演しました。

3年生でリーダーの信岡宏汰さんは「災害から10年が経ち、風化させてはいけないという思いが強くなっている。これからも土砂災害の恐ろしさと避難の大切さを伝え続けたい」と、繋げていく重要性を訴えます。

また、同大学興動館「災害を知り未来へつなごうプロジェクト」の学生たちは、地元のショッピングモールで開催される防災イベントに参加し、防災バックの作り方をレクチャーしています。副リーダーを務める3年生の鳥越淳志さんは「イベントに参加してくれる人は防災意識が高い人。まだまだ伝えるべき人がいると感じている」と、地元根差した啓発活動を継続していくことを強く志しています。

[紙芝居の貸し出し、上演の問い合わせは]

安佐南区社会福祉協議会 ☎082-831-5011まで



「広島市豪雨災害伝承館」が伝える教訓と知識を防災に生かす

一般社団法人梅林学区復興まちづくり協議会

復旧から復興へ。災害を語り継ぐ使命感とともに

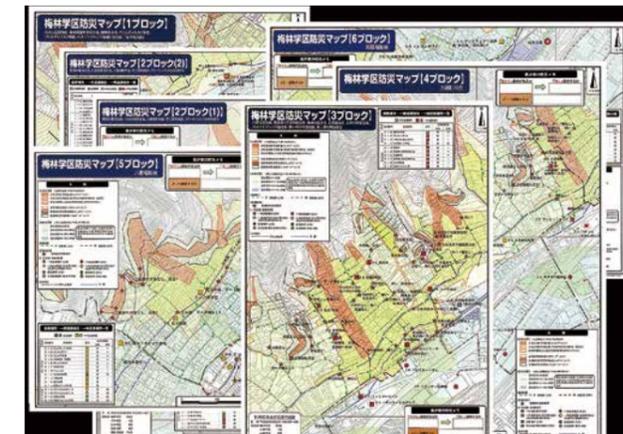
平成26年8月、広島市安佐南区などで死者77人(災害関連死を含む)の人的被害と、住家全壊179棟、道路、橋梁、河川堤防1,079件の物的被害をもたらした豪雨災害。一瞬にして多くの命、物を奪ってしまった災害を語り継ぐことで、防災・減災の意識を高めていこうと活動しているのが「一般社団法人梅林学区復興まちづくり協議会」です。代表理事を務めるのは松井憲さん。「平成23年に東日本大震災があり、3年後に平成26年8月豪雨災害が発生。これまでも全国各地で災害が起こっていましたが、実際には防災という言葉も浸透していなかったし、意識も低かった。それがこの山全体で50万立方メートルの土砂が流れ、まちを飲み込んでしまった。私たちはそれぞれにダメージを受けながらも、前に進もうと立ち上がりました」。



▲代表理事の松井憲さん

梅林学区では「平成26年8月豪雨災害」後、6ヶ月間をかけて防災マップを作成。住民が実際に歩き、気になる箇所を地図に書き出しました。夜は道が暗くて危険、水路に蓋がない、ガードレールがないなど、これまであまり意識していなかったことが、多くの気づきとなったといいます。さらに被災後初めて避難訓練を実施。参加者は例年200人前後ですが、住民の半数に当たる1,700人余りが参加しました。

被災者の心に寄り添うため寄付を募って作られた「復興交流館モンドラゴン」では、被災住民で「お好み焼き屋」を運営し、高齢



▲地区ごとに作成した避難マップ

者をはじめ住民が抱えた不安を共有し、励ましあったといいます。「第一土曜日は折紙、第二は介護予防体操、第三は防災教室というように、さまざまな取り組みを行った」と話す松井さん。そしていつからかモンドラゴンに他方から多くの人々が訪れるようになり、被災地案内や当時の説明をするようになっていったと、当時を振り返ります。

災害時は避難施設として活用できる「広島市豪雨災害伝承館」

モンドラゴンの設立から7年、約2万人を対象に勉強会や季節行事を行ったことで「確かな制度と施設」を作ることを目指し、行政とともに「広島市豪雨災害伝承館」の構想がスタート。令和5年9月に開館し、同会は指定管理者として運営に携わっており、松井さんは伝承館の副館長も務めています。さらに令和6年、伝承館は活動が高く評価され、第1回「NIPPON防災資産」の優良認定を受けました。

伝承館では、被害を伝えるだけでなく、その後の復興活動を伝える場所にしたい、との思いから、「学び」に重点をおき、来館者にはスタッフがガイドとして同行し、防災意識の向上に力を入れています。

「この施設は災害時の避難施設としても活用できるように設計から携わり細部に工夫を凝らしています。食料の備蓄はもちろん、救護用テントやAED、炊き出し対応のかまどベンチ、防災機材倉庫など、そういった所も見てもらい、参考にしてもらえたら」と話す松井さん。「残念ながら災害はまた起きるかもしれない。闇雲に恐れるのではなく正しい知識を身につける事で、いざというときの行動に繋がる。これからも私たち被災者の教訓と知恵、技術の共有を継承していきたい」という松井さんの言葉に力強さを感じました。



▲復興交流館モンドラゴンの様子



▲伝承館来場者から寄せられた多くの感想